

P1
FRONT LINE
● [インタビュー]
人・車・都市、そして文化●
妹島和世
あったらいいな、をつくる。

P7
ARRANGEMENT
●機械駐車設備／導入事例●
アエル

P9
ARRANGEMENT
●機械駐車設備／導入事例●
投資育成ビル

P11
TREND
〈建築分野のインターネット利用 Vol. 2〉
ネットワークが変える建築設計
日精ホームページ開設

P13
VISION
市街地活性化と駐車場整備

P14
ANOTHER PROJECT
●他事業紹介／展示造形本部●
文化施設ディスプレイ
阿波海南文化村 海南町立博物館

インタビュー／人・車・都市、そして文化

FRONT LINE

あったらいいな、をつくる。

建築家

妹島和世 Kazuyo Sejima

妹島和世は90年代以降、もっとも注目されている建築家の一人である。

新たな作品が発表されるたびに人々は驚き、

斬新なコンセプトをもつ妹島建築に新しい時代を発見する。

一般的な“建築了解”から、いい意味で解き放たれた建築家——

そんな氏を、ある人は「現代を映す鏡」と称賛し、

また、ある人はその作品を「感性がつくる建築」と呼ぶ。



にテラスがある「リビングが吹き抜けになっている」など。要は、部屋が3つとダイニングがあれば3DKです。公営住宅の制約である3DK、2DKという基準は守りつつ、一旦それをバラバラにして、さらに広縁やテラスを使って、上下、横、斜めと、インテリアが自由に並べ替えられているんです。

何でそんなことをしたかという点、一つにはプライバシーに対する考えからです。通常の集合住宅の場合、どこからどこまでが一户の家と外部にもすぐにわかかってしまう。ましてや間取りもほとんどワンパターンですから、私自身、親元を離れて一人で集合住宅に住んだときに、一番気になったのはこのあたりのことでした。

ところが、こうすると、外部にはどこまでが一つの家なのか全然わからなくなる。つまり、一般的なやり方では境界をハードにすることでプライバシーを確保するのですが、私はもっと違うやり方で、

「マルチメディア工房／岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー」では今年度の日本建築学会賞を受賞（西沢立衛氏との共同受賞）、これからの活躍がますます期待される妹島和世氏。

その氏がまた一つ、新たな衝撃ともいえるべき作品を完成させた。「岐阜県営住宅ハイタウン北方・妹島棟」——多分、これまで世界中の建築家が誰一人として考えつかなかったであろう、妹島氏ならではの大胆な集合住宅である。これによって建築には、さらに新たな「解答」が加えられたことになる。

外から見たときは全然違う「距離」をもつどこにもない集合住宅。

この集合住宅の内部は、外からはちょっと想像できないと思います（笑）。テラスは不規則に並んだ「穴」のようであり、一戸一戸のスペースも、通常のように均等なユニットをただ積み重ねる、というやり方にはなっていない。「ある階の1部屋とその上の2部屋でつくったメゾネットの3DK」「部屋と部屋の間

外部に対して「距離」を置きたいと思った。自分でも、なかなかいいアイデアだと思っています（笑）。

また外部との「関わり」ということは、他にも、ちょっと通常と異なることをやっています。実はこの住宅は、玄関一つで外と接しているというのではなく、少ない場合で4つ、多いのになると一戸の家に7つも8つも出入口が付いています（笑）。

親しい人でしたらダイニングキッチンから出入りして……、わざわざアポインメントをとって来るようなお客さまはダイレクトに和室に通す、子供の友達なんかはテラスからと、その家その家なりの面白い使い方ができているのではないかと期待しています。それに、出入口が玄関一つというのは、緊急時の逃げ場も「ここしかない」ということになりやすから、それも危険でしょう（笑）。

それからもう一つ。各家に庭みたいなテラスをつくり、洗濯機置場を設けました。もともと、それは一部の人に不評ではあるのですが、「一般論として、「なんで洗濯機置場が外なのか」と。

でも、24時間家の中で洗濯できる便利さは確かにわかるのですが、限られたスペースで無理に内側に取るよりは、私は、外に出すというやり方もあるかなと思って。また、それだけでなく近頃は、物事の価値基準が便利や機能的性一辺倒になってきて、とくに住宅にはそれが顕著です。だから、ここではそっちの価値は少々犠牲にしても、そのかわりに私は「人間にとって気持ちのいい、外を楽しめる空間をつくりたい」と思った。すると1年の半分ぐらいは多分、別の意味で洗濯も、もっと楽しくなると思うのです。

住むという行為においても、解答はたった一つではありません。たとえ地面と離れた高層の生活でも、毎日の天気や、自然のリズムが感じられる自分の「庭」があったほうがいい、と私は思った。

住宅の快適性には、いろんな解答があるはずだと私は思うんです。ところが一般の解答では今はもう数値がすべてで、湿度は何度、湿度は何パーセントと、あたかもその数値だけが快適さを得るための「正しい答え」であるかのようで……。そこを外すと、まるで不適合住宅のよう言われ方までされます（笑）。

もちろん、空調のコントロールは大事です。現代人はいまさら原始時代の生活には戻れっこないので、半分ぐらいいはそれも仕方ないでしょう。でも、それがあまりに行き過ぎてしまうと、冬は寒くて当然なのに、その冬にまで半袖で過ごす必要はどこにあるのかと……。あるいは、生き物としての気持ちよさ。病院のように密閉され、コントロールさ

れた空間よりも、窓を開ければ風が流れる空間のほうがむしろ、人間にとっては快適なんじゃないかと私は思っています。

閉じた空間は、機械を使う分にはコントロールしやすくして便利ですが。たとえば完全に閉じた真つ暗な空間をつくり、外気だけでなく、光も何もかも全部コントロールしたとする。湿度・温度を一定に設定し、光は人工太陽みたいなものを使い、毎日きちんと12時間照射するわけです。すると数値上は、この空間は「完璧な快適性をもった空間」ということになる。一方、空間をオープンにすればするほど機械のコントロールは難しくなり、数値上の快適性は得られにくくなる。

私は、一般的な解答とは違うかもしれないけど「別な解答」を提案していきたく

いいつも考えていて、その一つが今回の岐阜の集合住宅ということだ。

このテラスは、光は、前から入ります。広さは10畳ぐらいあって部屋のようなプロポーシオンをしています。ベランダや共用廊下と同じく「外」です。

ただ、通常の幅1メートルぐらいのベランダでは自然を楽しむ空間とはなりにくいので、ならば、たとえ地面と離れた高層集合住宅の生活であっても、毎日のお天気や自然の空気、自然のリズムを感じられるような自分の「庭」があったほうがいいんじゃないか、と思つて……。

また共用スペースという意味では、当初の担当者からは、「建物のどこかに、住民同士でコミュニケーションできるよ



マルチメディア工房 岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー
以前学校だったところを利用してつくった、日本初のアートとメディアをミックスで学ぶための24時間体制の斬新な専門学校。講師陣には国内外の著名なアーティストたちが名を連ね、建物は単なる学校にとどまらず、アーティストの住居という要素を備えている。妹島和世はこれを校舎側にはなく運動場に、建築を幾分沈める形でつくった。（日本建築学会賞受賞/西沢立衛との共同受賞） 新建築写真部



PROFILE

- 1981 日本女子大学大学院修了
- 1981~ 伊東豊雄建築設計事務所勤務（87年まで）
- 1987 妹島和世建築設計事務所設立
- 1992~ 非常勤講師/日本女子大学、東京工業大学、東京理科大学、早稲田大学など
- 1995 西沢立衛との共同設計開始

【主な作品】

- 1988 PLATFORM I（週末住宅）
- 1990 PLATFORM II（カメラマンのアトリエ）
- 1991 再春館製菓女子寮
- 1993 パチンコパーラーI・II
- 1994 森の別荘
- Y-HOUSE
- 1995 調布駅北口交番
- 1996 岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー/マルチメディア工房（以下、西沢立衛との共同設計）
- 1997 S-HOUSE
- 熊野古道なかへち美術館
- M-HOUSE
- 1998 岐阜県営住宅ハイタウン北方・妹島棟

【主な展覧会】

- 1993 KAZUYO SEJIMA 12PROJECTS展（ギャラリー間）
- 1996 KAZUYO SEJIMA 87-96（Architectural Association：ロンドン）

【主な受賞】

- 1888 SD Review 鹿島賞
- 1989 吉岡賞
- 1992 新日本建築家協会新人賞
- 1994 商環境デザイン賞大賞
- 1995 環太平洋地域文化建築賞
- 1998 日本建築学会賞

【主な作品集】

- 『建築文化/特集・KAZUYO SEJIMA & ASSOCIATES 1987-1996』[EL CROQUIS 77 (I)] / 特集・KAZUYO SEJIMA 1987/1996』[G A・妹島和世読本]

うな場所をつくったかどうか」と言われていました。でも、わざわざそういう場所を別のところにつくるよりも、私自身はもっと自然に、小さなきっかけから住民同士が仲良くできる場があったほうがいいんじゃないかと。

このテラスには何となくコミュニケーションのきっかけがあり、したがって、したい人はそのままオープンにここでコミュニケーションすればいいし、反対に付き合いは苦手という人は、植物でスクリーンを立てたりして閉じることも自由。その意味では、ここは洗濯機置場というよりは、自然を感じる場であり、ご近所同士が立ち話をしたり、子供たちが遊んだり、また休日には家族が外で食事を楽しむテラスになったりと、いろんなふうに使われるわけです。

いろいろ考え、悩んで、たどりついたのが、「回廊」
——弱い境界を2枚つくる、とこういふ。

私の建築はガラスが多いとよく言われますが、それを自分の中でも一度考え直すきっかけになったのは「調布駅北口交番」の設計でした。それまでは、どちらかという中を考えるほうで、外は結果としてつくるといような感じでしたから。ところが交番をやることになり、中と外とのギャップを考えるようになりました。

交番は、人が道を聞いたり何かあったら尋ねるとい、街にオープンに突き出す機能が重要である一方、そのバック部門には見せてはならない機能をたくさんもっている。たとえば24時間体制で真夜中でも警務にあたる人がいる一方、裏では次に交替する人が仮眠をとっている。

あるいは、そこでは食事もするし、ある種の生活機能は簡素とはいえ全部必要になるわけです。そして交番ですから当然、問題を起こした人を一時置いておくためのスペースも必要。

すると、この「開く」と「閉じる」のまったく正反対の条件を同時に必要とする建物で、外と中をどのように関係させたいのか。

いろいろ考え悩んで、思い出したんです。それまでは、少なくとも閉じることについては、建築で堅固な壁をつくれれば簡単にできると思っていた。ところが、これをさらに拡大して考えると、壁さえあれば、何もかも閉じれるものだろうか。たとえば情報、これを本当に、遮断できるものだろうか？



調布駅北口交番
上田 宏 (GA photographers)

今の時代は、必要のない情報は入れたくない、と思つても絶対に無理です。排除して遮断しても、また新たな情報が嫌でもポンポン入ってくる。そもそもネットワークとはそういうものだから、閉じること自体に、意味がない。したがって交番の場合でも、壁を「透明にした」からといって、それで交番の機能自体がすべてがオープンになるということはあり得ないわけです。よくよく考えてみれば、物事は何であれ「境界1枚」どう

こうすればどうなる、という話にはならない……。そして、たどりついた一つの解答が「回廊」。弱い境界を2枚つくる、ということでした。そうしてつくったものがマルチメディア工房です。一見外から中が見えそうですが、実はもう1枚建具があつて、結局は見えない（笑）。だから、扉の開閉で、外と中をつないだり切ったりすることができま

これは「熊野古道なかへち美術館」でも使っている手法です。日本画の美術館なので展示室に自然光を入れるわけにはいかないのですが、壁を立て、閉じた塊にするのも嫌だと思つて。それでガラスの回廊で人々の動きが外にあらわれながら、同時に外の負荷を一度ここでカットして、展示室には自然光は一滴も入らない、というものをつくりました。

世の中はどんどん変化しているのだから
むしろ建築は、変わらないことの方がおかしい。
だから、今までとは違う提案を少しでもしていきたい。

1年程前に、恵比寿にあつた事務所をこの品川の倉庫に移したんです。私たちの仕事は通常のオフィスワークとは違いますから、ただきれいなオフィスビルを借りても実質的なメリットはあまりない。いわば町工場みたいな機能と、コンピュータをしたりするデスクスペースの両方が必要ですし、時間も夜中までです。それで、じゃあオフィス代もこっちの方が断然低コストだし、24時間自由に広々とした中で仕事できるというので、思い切つてここに移ったんです。

下見に来たときにはちょっと殺伐とした印象でしたが、移ってみると一挙に慣



熊野古道なかへち美術館
新建築写真部

れて、今は、自分たちにとっては使いやすいオフィスだとすごく気に入っています。す。一戸一戸が離れて建っていますし、自然もあり、空も広くて、疲れた体をリラックスさせるのにも丁度いいんです。最近、たまに街中に行くとゴチャゴチャして、とても疲れます（笑）。

つまり、ひと昔前なら、オフィスはこう、住宅はこう、商店はこうと、それぞれ理想とする形が決まっていたから、それ以外は考える必要もありませんでした。ところが今は世の中自体が変わってきて、たとえばオフィスでも、オフィスらしくすればするほど、仕事はしに

くという場合も出てきました。同じく住宅も、今は形としての住宅らしきよりは中身。自分にとってリラックスできる家がいいとか、オフィス機能をもった住宅が欲しい、あるいは逆に住宅機能をもったオフィスが欲しいというように、求められるものがずいぶん変わってきました。

そして、その意味では、建築は変わらないことのほうが、むしろおかしな私に思っています。建築は絡む金額が大きくて、時間もかかりますから難しいのは確かですが、今あるものだけが正しい解答ではないのですから……、中途半端な妥協は私にはしたくないと思っています。

最初は、ものすごく身近なところから考えていきます。もちろん私だけが考えるのではなく、パートナーも含め、所員全員が意見やアイデアを出し合っていて、そうやって最終的な案がつけられていくわけです。はじめから「今回はこれでやろう」と決めていくわけではないですから、とにかく最初は手当たり次第、与えられた条件の中で何ができるかと、ありとあらゆることをやってみる(笑)。

建築は条件が毎回違いますし、その条件も、建築基準のように非常に一般的なルールが条件のこともあれば、その時々々のクライアントの考え方や、あるいは住宅のように完全に個人の好みや条件ということもあります。だから考える順番としてはその条件が第一で、その上で「どうやれば今回、一番いい解答になるだろうかと」と、それを必死に考える。

条件をどのように考えるかというのが一番たいへんでもあり、面白いことでもあると思います。住宅の場合でも、結果は、完全にクライアントの好みでそういう

う家になったというのとは、権利も失われているけれど、負うべき義務責任もないということ。私自身は、つくり手として責任を負うという意味でも、名前は出すべきだと思っています。

個人的には、今は大きいものややってみたいですね。サイズが、ただ大きいというふうな(笑)。倉庫でも、何でもいんです。立派な建物である必要も全然ないです。ただ、異常なサイズになっってしまうようなものが都市の中に立つときに、どんなことが考えられるかと思っ

公共の建物が少しずつ多くなりましたが、公共の建物はへんなことが多いですね(笑)。

たとえば、今流行りのバリアフリー。これは確かに必要なんですけど、これもある日「平らじゃなきゃいけない」となったときに、別の意味でまたへんなことが起こっていると思います。一度それを



パーキングというのは、現状の私たちの生活にとっては不可欠ですから、インフラとして整備したほうがいいと思っています。たとえば、緑などの環境整備。これにも同じことが言えるのですが、日本人が環境問題を真剣に考えるようになったのはつい最近のことです。だから整備も、まだ稚拙な段階で。したがって、それを何とかしようというのであれば、私が思うに、たとえば緑を増やすには公園をつくるウンスンという情緒的な話にはならない。むしろ緑は「空気を浄化する装置」と捉え、「何平米」ことに必ず一つ、緑が百本以上バサッと植えてある場所をつくる」というように制度化して、そう

やって整備するほうが早いし、面白いことができるはず。パーキングもこれと同じ発想です。ビルの附置義務として、などという話ではなくパーンとインフラで、法律でこれをやるようにする(笑)。

看板をベタベタ貼るとかではなく、たとえば、この塔に植栽してグリーンタワーをつくれば、環境整備にもなります。あるいは、夜は暗くて寂しくなるようなエリアならば照明機能をプラスして、これを照明として使うこともできます。

公園の設計をするときなんかには、これはうまく使えるのではないかと思います。通常、公園の駐車場というのは地べたにターツと並べるようにつくりますが、あれをやると面積は結構とられるんです。だからパーキングタワーにして、浮いた土地を他に使えば、公園の駐車場にすずいぶん違う風景が生まれま

パーキングタワーを何本か立てて、その周りを緑化したり、遊歩道を巡らしたり、ベンチを置いたり……、駐車場にもちょっとしたアイデアを公園の一要素としてプラスすれば、ただ車がギッシリ並んでいる空間をもつよりは、ずっといい公園ができると思います。また、それは街に置いて

Photo./後藤さくら(P1~6)、妹島和世建築設計事務所(2P),PPS(表紙)

●同封の「アンケートはがき」に必要事項をご記入の上、ふるってご応募ください。封筒のラベルに印字されているお客様番号を忘れずにご記入ください。

PRESENTS

87-94
KAZUYO SEJIMA ARCHITECTS & ASSOCIATES
非売品・直筆サイン入り

3名様
GA
妹島和世読本
直筆サイン入り
●A.D.A.EDITA Tokyo発行
定価2800円+税

5名様
日経ネットナビ
インターネットホームページ
BEST BOOKMARK 2000
●日経B.P.社発行
定価1600円+税